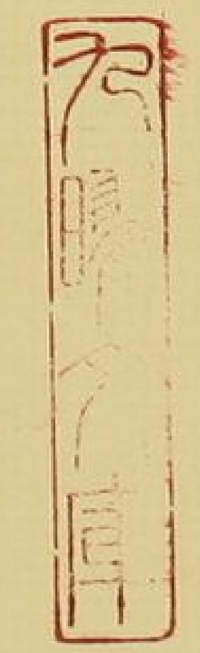
# 後撰和歌集 上



後撰和歌集巻第一

春哥上

正月一日二條のきさいの宮にてしろき
おほうちきをたまはりて

藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる

春たつ日よめる

凡河内躬恒

春たつとき〻つるからに春日山きえあへぬ雪の花とみゆらん

兼盛王

けふよりは荻の燒原かきわけてわかなつみにやたれをさそはん

ある人のもとにあらたにまいれりける女の侍けるか月
日ひさしくありてむ月のついたちころまへ
ゆるされたりけるに雪のふりけるを見て

よみ人しらす

白雲のうへしるけふそ春雨のふるにかひある身とはしりぬる

朱雀院の子日におはしましけるに
さはりありてえつかうまつらてのふみつの
あそんにつかはしける

左大臣　小野宮

松もひきわかなもつますなりぬるをいつしか櫻はやもさかなん

院御返し

松よりもへしあけは春の野の子日をなにもひさしかるらん
子日にはたれとかまたもとりもさそふ小松もひきつゝ
なんまりひろやひりたれし

よみ人しらず

春の日や野へに小松をひきさしてゆく我もかはらにいつまてかねんと

読しらす

新玉の春日の野への若菜をつみしや人をつむやと　古今無風奇相似

子日しにまかりける人にをくれて侍りける
よしけれ

みつね

春の野に心をやらんと思ふをやむねはいつまてこゝろそ
宇多院に子日せんとありけれは式部卿のみこ
をとらせふとて

敦慶親王　延喜親王實寛平第十　母宗懐中息女

春の野にゆくとふめるをいさりけれ小子日にこゝろみて
たゝ川春乃ことゝそ

紀友則

水の面にあや吹みたる春風や池の氷をけふはとくらん
寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

吹風や春たちきぬとつけつらん枝にこもれる花咲にけり

しのすいりにやまとへまかりてまうてき
けるをりに庭より侍ける人の家のむめの花を
をりて侍けるをとやむことなき所よりめ
ゆかりのかりにけりおくる春なやめりとに
けかりしけり　　　ミつね

春日野にをやのはかもと見に心さしておもひやらす
かへさにまかりけるをとこなりとにそのもとなるこの
庭の木のかれたりける枝ををりてけるを
しける　　　兼覧王女

もえ出る木のめを見ても音をそなく　枯にし枝の春をしらねは

女の家つくりよゆかり出て侍けるにめつらし
こきりとふかきこれりのいひなんとし侍きる
をかしともきこひとりにおひ侍くれはむ月の
ついたちころよいひけりしける

よみ人しらす

いつのまに霞たつらん春日野の雪たにとけぬ冬とみしまに

閑院左大臣　冬嗣

なへとさりにおりつゝみて梅の花もこゝにちるやかそめてん

前栽に紅梅をうへて又の春をそくさき
けれは

藤原兼輔朝臣　入古今　中納言兼輔卿　承平三年薨

宿りしてはるの山へにねたる夜はゆめのうちにも花そ散ける

延喜御時哥めしけるにたてまつれる

紀貫之

春霞たなひきにけり久方の月の桂も花や咲らん

花なし時にやしつるに侍けるはなをよめる

よしともおもひきこてはらんせけをかくおもしく

てあそふ人よをくり侍ける十二首かうち

躬恒

いつこにも春の光ハわかなくにまたみよしのゝ山ハ雪ふる

人のもとにつかハしける

伊勢

白玉をつゝむ袖のみなかるゝハ春は涙もさえぬなりけり

人よ忘られて侍けるは西乃やまふきを

をれとて

よみ人しらす

春立て我身ふりゆくなかめにハ人乃心ハ花と散けり

題しらす

万葉

我せこにみせんと思ひし梅花それとも見えす雪のふれゝハ

こそてふ人をおもふに我やとの梅の初花折つくしてん

ことならハ折つくしてん梅乃花ちるまて人のさそをみるには

吹風にちらすもあらなん梅の花我かり衣一夜やとさん

我宿乃梅の初花ひるハ雪よるハ月ともみえまかふかな

梅花よそにみしらん見るよりもこゝろむつるゝ色にもそめ

梅花おれハこほれぬ我袖に匂ひかうつせ家つとにせん

素性法師

たとへにつきてかくふかりて

よみ人しらす

心そてわかなハおやる梅花香をとめて来ふらん人のあさき

かしらへて心つけゝる女のもとにいひつかはした

まちくらせとはいひけるを又の日しをつかはす

なりけれハ

人心うさこそまされ春たてはとまらすちる花にくらへん

よみしらす

梅花香を吹くる春風に心をそめハ人やとかめん

万

春雨にふるハ野山にましりなん梅の花かさありといふなり

かきくらし雪ハふりつゝしかすかに我家のそのに鶯そなく

谷さむみいまたすたゝぬ鶯のなく声わかみ人のすさめぬ

鶯のなきつる声にさそはれて花のもとにそ我ハ来にける

万

花ちるにもまたちるらむ鶯のなく一声を聞とこそかん

君かため山田のさハにゑくつむとぬれにし袖ハいまもかハかす

あひしりて侍ける人の家にまかりたりけるに

梅乃木待つりこみの花はさかんとはおもはす
せしそこにしんといひ侍けるを嘗なく侍りけれは

朱雀院兵部卿のみこ 寛平五年三月に若にて叙同延長八年九月薨

梅も今はさかりになりぬらんたのめし人のおとつれもせぬ

返し

紀長谷雄朝臣 延喜二年参議十年権中納言十二年二月薨 六十八

春雨にいかにそ梅や匂ふらん我見る枝は色もかはらす

春乃月よのつかくありてよめる

よみ人しらす

梅花ちりてふるらむ春雨の降りて鳴なく鶯のこゑ

かよひ侍ける人の家の前なる柳を云

やつよく

元孫

いりゐ家のかとかりに見ゆる青柳はとやなくらん鶯のこゑ

松乃りとに花はし遠く待て花を見やりて

坂上是則

ぬかみかとさらの松の陰にゐてうつろふ花をよそにこそ見

藤原雅正

花の色はちらぬまはかりふるさとにつねには松のみとりなりけり

紅梅乃花を見て

躬恒

紅に色をかへても梅の花かそことくに匂はさりける

うきこれはまとぬしてさけるなゐへけるに雨へよ

梅乃花よ雪のふりかゝりけるを

清しゆき

梅乃雪はつもるとも見るらむ梅のもちろふまゝこすおてさらん

菖蒲節にのはやのまへよ紅梅をとらへく給

けるを男とせかりれ後花ちさなんとし

きるを女とらもその枝をおりてこすのう

ちよりこれはいてかひとひくして給けまゝも

表とにさ紅まさるへきをもれしとよもえおゝすとそみゆ

延宝弐年正月参議中将如元

そしめて寧桐よなりて給けるとし

小ちん

# 後撰和歌集巻第二

## 春中

としおほくほ梅花をとらへてくおくりはへりし
春おりふところにいれて

藤原枝幹朝臣　桜案　天慶元七月薨七十五

らへしたれもらんとしをあまよなさちかきれいうみにかりなら
ゆやのまへに竹のあるかもとに宿りて

菅原伊衡朝臣　延喜十六年右少将七年蔵人延長三年任同十月叙

竹ちかくよるとはせし鶯の鳴こゑきけはあさいせられすを
やまとのかみの山をこゆるとて

僧正遍昭　延喜八年正四下兼内蔵頭　兼平四参議延長三年右兵衛督

いそのかみふるの山への桜花うゑけん時をしる人そなき
花山にて道俗さけたうへけるおりに

素性法師

山もりはいはゝいはなんたかさこのをのへの桜おりてかさゝん
おりしるき桜をおりてとちもたちにかはり
かりのおれは　よみ人しらす
桜花いろはひとしき枝なれとかたみにみえぬはなかなか
又
伊勢
見る人のこころかそれはおもひさりさらすにみえつるなるをはゝ

櫻の花をよめる　よみ人しらす

吹風をなかしの山の櫻花のとけくそみるちらしとおもへは

前栽に竹乃中に櫻のさきたるを見て

坂上是則

櫻花けふよくみてん呉竹の一よのほとにちりもこそすれ

題しらす　よみ人しらす

櫻花句ふともなく春くれはなとかなけきのしけりのみする

貞観の御時ゆみにわさゝせまつりけるに

河原左大臣　融

春ふかくなりゆく我身はねまつ人のこゝろにさへそかせむまゆみ

家よりとをき所にまかりけるとき前栽乃櫻の

花にゆひつけ侍る

菅原右大臣　延喜廿三年本官正二位　正暦四年五月贈左大臣正一位十一月贈太政大臣

櫻花ぬしをわすれぬものならは吹こん風にことつてはせよ

題しらす　伊勢

青柳のいとよりはへておるはたをいつれの山の鶯かきる

花のちるを見て　凡河内躬恒

あひおもはてうつろふ色をみるものを花にしられぬなかめするかな

題しらす　よみ人しらす

久方の雲ゐに中とふ声すなり霞吹とけこのめはるらせ

朱雀院の桜のおもしろきことゝものゝ給
卿にはくり給へりけるかへりことにかくは
りのまなとむかしをおもひ出て

大将御息所　右能子女御元良　仁善子母

ちらさらは我にふつけそ桜花人つてにやはきかんと思ひし

返し　よみ人しらす

万

春霞八木ゝれはおほかた月影をも隠して
立よる家のまへは山あさみ桜のいろもひとつを
大空におほふはかりの袖もかな春咲花を風にまかせし
庭よりひろひつゝちらちらは女をまつりけり

なけきは春とまつるよはひかなそくみくねたり
春雨のふるはおもひのこさえりせぬものとけさのみ
めさましやまんとおもふするかんをと女
まいひつかはしありけるかへし
りえゆふかけさは春のはつかにしふもみえ
女乃りにつかはしける

藤原師尹朝臣　後小一条左大臣左大将天暦二年権中納言　左大将

青柳のいとつれなくもなりゆくかいかなるすちに思ひよるらん

右衛門のかみやまと守の家にまかりて遊けるに　兼子同入道大臣時右衛門督　兼輔右衛門同道時右兵衛

そこの花おもしろかりけれはおりにつかはし

しをりけれはさこえさりけり

山里にちらまなをしき桜花匂ふはかりもえしてまほし

はへし

匂ひこき花のかをりそてそこにたへてみるらん人の心は

小弐によみてつかはしける

藤原朝忠朝臣

花しもあまたものかすにつもりてみれはおもひぬ山にへやまし

返し

我やとに思ひぬ山の花にのみ花さかりゆく春をとゝめん

よみ人しらす

宮道高風

春の日の玉りにわたる鶯のあしひきの思ひにするかな

寛平御時花の色かすみにこめてみせすといふことをよみてまつれとおほせられけれは

藤原興風

山風の花の香かよふふもとには春の霞そほたしなりける

よみ人しらす

春雨の世にふりにたる心にもなほあたらしく花をこそおもへ

京極のみやすん所にをくり侍ける

春霞たちて雲ゐになりゆくはかりのこゝろのかはるなるへし

題不知

移しまぬとさのみそわかみよの暮とてにおもしよせ
このひとりきゝたれとこのりとひとつの葉の
とゞまりて帰りそく一つてしてとゞめす
とく桜の花の下にありてよそへて詠けり
我宿の桜は花のいろはすくなくとも花のさかりはさそてこそをしまん
とよみける人の家に花をとふとて
かの翁のおかしさに
年をへて花のかゞみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん
よみて鳥をさしてとなりの家によそくり
詠けり
あるみちのべにつゝしき

我宿の花よりことにふかき香ひありて春もきなむよ
みぶの忠岑かたのつゝひれさそてみ
をこせく詠けるつゝ小舟をとらみて詠
けるをしに
紀貫之
ゆりねとていとかなしひそ春風にやむつかし
かのかしなくけり

後撰和歌集巻第三

春下

贈太政大臣あひわかれて後かの所にその
ことをさして侍りける

顕忠 天暦二年大納言 九年右大将 天徳元右大将宣旨右大臣 康保二薨六十八

藤原顕忠朝臣母 大納言源湛女 位五上 字載 更衣

常なくてなりぬる思ひ着かく秋月ひとつのおもすと有る
行くしれ花のあめにさせりけるうちまけける
とかくて中務につかはしける
清ゆ或
冬しまたかくにちるらむ桜もなくなくに待たれけるひは
ほり

返し

春ふかきめにさせまことに桜花ゆふんとふつまやぬ
影しらす　よみ人しらぬ
花のちる花の涙なりけるにくいつまとも見ゆきさ春
朝忠朝臣となりに侍りけるに桜のいくつ
花をれといひつかはしける
伊勢
かささいは花をもとみつらいはこめに風の吹きもこそすれ
女につかはしける　よみ人しらす
春の日のなかき思ひは道と人の心まで好やあへぬらん

題しらす

よそにくともみさとは思ふそらく我宿にしも咲かれ

貫之

風ふけはたえてそ花のちりまかふ春ふかき

あまたのあるよりもみ侍りける女清はしくあり

折りわきけれは庭にあるをとこれの花を

つけていひつかはしける

読人不知

我宿にすみれの花おほかれはきやとる人やあると待

色はしらす

山高み霞をわけてちる花を雪とやよその人はみるらん

吹風の色そふみやとおもひうつる花かな花をしみて恋しき

清原深養父

ちる花に恋はかりのいけさこそ色やなかにあそくらん

つらよせしそこはかなしけり女ともちらの

わかよりさくらのはなのいとをかしくありけり

枝ををりてこれそこのむよ見えて人もとなお

つかはしける

こわつこさみ

惟喬親王女

我宿のさけさいは花も見てあかれはむくもとしてへてもえ

又の見こそ心はそらやまもわてつに

りぬとひける人なんありける

春の池のほとりにて

よみ人しらす

春の日の影そふ池のかゝみには柳の眉そまつはみえける

たる人にはかくれこれにも花をしみきる所にて

くいりちて世をやはなして花のときはをありとみへく

延喜の御時殿上のをのことものなかにめしかは

きこしめしてかのはなしさしかけりけれは

てふ

凡河内躬恒

かさせとも老もかくれぬこの春そ花のおもてはふせつへらなる

題しらす

よみ人しらす

一とせにかさなる春のあらはこそふたゝひ花をみんとたのまめ

花のもとにかくてこれかれとも(?)あかくちるを

なかめやけるついてに

清輔

春くれはちりてふことをおもはぬよさくらいなれ花まそ絶ぬ

春花見に出たりけるにまを清らそし

そのきのそのぬるをなかりかれはある

ゆしさのふかくてりとくこひりゆふ

てこさくりけるとしいそひつくりしたりける

よみ人不知

春霞たちなかくしそ花桜よ梅とてめてし紅の色さ
へとこそ思ひわたのめそこせく待なれは
ちる日さへ宿のかはり紙かきて君こそ我もたのまん

読人しらす

伊勢

鶯に身をあひかへはちるまても我ものにて花はみてまし

元良親王兼茂朝臣の女にすみ侍けるを
法皇のめして後ほかにうつされけれは
こと侍りけれはあくるとしの春桜の
枝にさしてかのさうしにさしをかせ侍る

花の色は昔なからに見し人の心のみこそうつろひにけれ

もとよしのみこ　元良　陽成第一三子　天慶六薨　五十四

月のおもしろかりける夜花をみて

源信明

あたら夜の月と花とを同しくはあはれしれらん人にみせはや

桃園の井といふ家より藤原治方に
つかはしける

橘のきむひらか女

散人をもたれあひけるあたら井との数ならぬ花
助信敦忠一男天徳二年少将後右中将
さけの母男まかりて後かの家に敦忠
桜花ちりかひけるに桜の花ちりまかる

ならにまかりてありしに紀けましはあらぬ人の
よひてしけり　よみ人しらず

今よりは風にまかせん桜花ちる木のもとに君とまりけり

返し

あつたゝの朝臣　天慶二年参議左中将又権中納言　六年三月薨卅八

風にしもなにかまかせん桜花匂ひあかぬにちるはうかりき

さくら河といふところありときゝて

貫之

つねよりも春へになれは桜川花の波こそまなくよすらめ

前栽に歌合あるところにて

くねさけの朝臣

わかやとの一重ことには山吹のやへのにほひをちらさゝりけり

よみ人しらず

一とせにふたゝひさかぬ花なれはむへちることを人はいひけり

在原元方

寛平御時桜の花のえんありけるに雨の
ふりそれは

藤原敏行朝臣

春雨の花の枝よりなかれこはなかそとらあまとめかやらむと

その国にながりけるにながのつゝみにて

よみ人志らず

春ふかき色にもあかれ住のえのそこともみとりにしほの浜松

女とも花ぞんとて聖へよいそく

典侍よるかの朝臣

春くれはむみにと思ふ心より野への霞とゝもに立けれ

あひしりて侍りける人のひかしへまかりけれ

は花さかりにつかはしける

よみ人しらす

我をこそとふにうからめ春霞花につけても立よらぬ哉

源清蔭朝臣 大納言陽成院源氏 天暦四年薨

返し

立よらぬ春の霞をたのまれよ花のあたりをこれはなるらん

山桜をおりておくるとて

伊勢

君みよと尋て折る山桜ふりにし色と思はさらなん

宮つかへしける女のいそかみといふ所に

まかりて京なともあらのりにつかはしける

よみ人しらす

神さひてふりはさとにすむ人は都に匂ふ花をさへ見ぬ

法師になりてのちありける人やまとにまか

りて侍ける後ひさしく侍て返りまかりて侍る

人のもとより月比はいかにそ花はさかりに

ありやといひつかはしたりけれは

吉野山みねのゝ山の桜もしら雲とのみみえわたるらん

亭子院の哥合のうた

山桜咲ぬる時はつねよりも峰の白雲立まさりけり

山さくらをみて　貫之

白雲と見えつる物を桜花けふはちるとや色ことになる

題しらす　よみ人しらす

我やとゝたのむ友の花立よりくともと波にたちかふ

花さかりまても見ぬよ吉野川の春はふる岸の山さき

人の心なのめならすなりけれは風まよふち

つまはしらぬとこれみよとてつくりけり

思ひつゝあくらすかはのおかむもとも志てさかふ山吹の花

やよひつりの花のちりけるにみちゆりけふ

僧正遍昭

折つれはたふさにけかる立なから三世の仏に花たてまつる

題しらす　よみ人しらす

みなそこの色さへふかき松か枝に千とせをかねてさける藤波

やよひのしも十日はかりに三条右大臣兼輔朝臣の家にまかりわたりて侍けるに藤の花さけるやりみつのほとりにてかれこれおほみきたうへけるついてに

三条右大臣　兼左大将　内大臣高藤二男

かきりなき名におふ藤の花なれはそこひもしらぬ色のふかさか
兼輔朝臣
色ふかく匂ひしことは藤波のたちもかへらて君とまれとか
つらゆき
さをさせとふかさもしらぬ藤なれは色をは人もしらしとそ思
ことふえなとしてあそひのところかへり侍
けるかりに藤の花にさけるをとまり
て
三条右大臣
昨日見し花のかほとてけさみれはねてこそさらに色まさりけれ
兼輔朝臣
一夜のみねてしかへらは藤の花心とけたる色みせんやは
つらゆき
朝ほらけ下ゆく水はあさけれとふかくそ花の色はみえける
題しらす
よみ人しらす
鶯のいとによるてふ玉柳吹なみたりそ春のやまかせ
さくらの花のちるを見て
躬恒
いつのまにちりはてぬらん桜花おもかけにのみ色を見せつゝ
あつみのみこの花見侍けるところにて
源仲宣朝臣
延長八年正月卒年六十位
右兵衛督
大納言貞恒男
光孝天皇孫

ちることのうきも忘れて哀てふことを桜にやとしつるかな

桜のちるを見て　よみ人しらす

桜色にきてる衣ふかけれは過る月日も惜しけなきかな

やよひはかりの月あかゝりしつこさめし侍

文にそへて左大臣の家にはへりける

清少将

あまりさへありて行へき年たにも春にかならすあふよしもかな

返し　左大臣

つねよりものとけかるへき春なれは光に人のあはさらめやは

清○にまいりてきこえひけつる所にはへりけると

物てひさしくまうてこさりけれは藤に

くりおくる春やよひのつこもりにけり

貫之　藤原雅正

花こそ年は暮にさ立帰り春は今ふに成にけるかな

とりふちの花をもみめと待人のこぬよりのちはよをは春

返し　つらゆき

君にたにとはれてふれは藤の花たそかれ時もしらすそありける

風へむる心ちよはふくれは花見ふゆく人生ちるもせを

題しらす　よみ人しらす

をしめとも春の限のけふの日の夕暮にさへなりにけるかな

三弥

わすれてもわすれぬ春のあけほのはいつとてもなをあかぬ
やよひのはてとなりけり

清ゆき

ゆくさきはなりやよひとたのめとも春の限はかすみそめけり

よみ人しらす

花しあらハ何かハ春のおしからんとゝまる春ハあけほのゝほと

祐恒

暮てみおもとゝこにあらん春の日を花のけふこそかさん

庭よひのつこりのまゝ月影さしてこそ

よしなく待身のおくふかきつけ待らん

つね政

みをえん河そとゝへとたのまれぬ我身は道ハわきまへ

清しゆきさしておなしとふしかなん

身はなりけり

後撰和歌集巻第四

夏哥

題しらす　　よみ人しらす　次

春よりハ家のおもひをまとこさろひとさへかりさき侍り

卯花のさけるかきねの月きよみいねすきけとやなく時鳥

卯月はかりとも思ひ待ける所ちかく

侍てあからさまにせうそこつかハしてんと待ける

ほとをなく待わひて

時鳥こゐるかきねハちかなから待とをにのミ声のきこえぬ

返し

時鳥思ふ心ハありなから逢ひよなくとこさねぬ成らん

りのひとに待けるへ人のつまをすく待わひて

その家のかきねの卯花をおりていひやりて

て待ける

うとめミさ君かこゝろねの卯ハもからしとこそ我身のむか

返し

うき物とおもひしりなハ卯花のさけるかきねも尋ねまし

卯花のかきねあるを家とて

とふ人ハ逢ふ宿ともみるまてにかきねをたつ咲卯も

ともしみちれかしひまもてこゑしくそみく

侍りけるとて

白妙にゝほふかきねの卯花のうくもきてとふ人のなきかな

時わかすふれる雪かと見るまてにかきねもたわにさける卯花

あひ見しもまたみぬ恋も時鳥なと卯花のかけにかくれし

卯月はかり月おもしろかりける夜人につ

かはしける

あひ見てもまたあかぬ心をしる月よおもしろきにもおもひ出らむ

女のもとにつかはしける

なりとのゝ音羽の山の時鳥きこえて鳴をまつもおなし

よみ人しらす

伊勢

木かくれてさ月待とも時鳥羽ならはしに枝うつりせよ

菅原のおほいまうちきみの家に侍りける女に

のてふみつかはし侍りける人のかくしてかくれ侍

つけくはへてけり

良岑義方朝臣

[兼平六男 天慶二年蔵人 同八年中務丞 天暦元年]

ひそみし昔の宿のほとゝきすいかなる声とかはらさるらん

かとのまへよりわたるとて物見侍りける女車よりいひ入

て侍りける

よみ人しらす

ゆふ暮のそらに人の玉かつらかけてそたのむおなしかさしを

返し

ゆふたちのはれゆけてそらにすゝしくなのあらはれてかはみなつきのせ

題しらす

この比は五月雨ちかみ時鳥思ひみたれてなかぬ日そなき

詠人は五月雨しなく小郭公思ひのかはにあはさらん

句は時鳥まかりにし花そたちゆく夜はみたれ咲の事也は

朱雀院の五月ふたつかりし御時あち

ことさらにさ月斗御書所によりてさけ

なとあまたこれかまへ奉るよみけるに

大春日りたの

五月雨に物思ふ人の時は郭公をやうくひとかふせん

夏夜ふかやふか琴ひくをきゝて

藤原兼輔朝臣

みしか夜のふけゆくまゝに高砂の峯の松風吹かとそきく

おなしくを　時ゆく哉

足引の山した水のゆきかよひことのねにさへなかるへらなり

題しらす

藤原高経朝臣　贈太政大臣長良七男　蔵人頭従四位下　右兵衛督

夜ならはおほつかなしといひてまさゝめのちりてちるころもまれなる時に

壬生忠岑

夏よりもあかなさ秋は夏のよに鳴くこゑいまそ待たれぬる

あはれりて待けるの中乃かもこれもんや

もありなむとおもひてえあはさりけ
れは

よみ人しらず

よそなからおもひしよりも夏の夜の見はてぬ夢そはかなかりける
夏の夜しはしはかりてかへりにける
人のもとに又あしたにつかはしける

伊勢

二声ときくとはなしに郭公夜ふかくめをもさましつるかな
人のもとにつかはしける

藤原安国

あふと見し夢にならひて夏の日のくれかたきをも歎つるかな

よみ人しらず

うとまるる心しなくは郭公あかぬ別もけさはまさらまし
やよひはかり待ける法師郭公をききて
おりはへてねをのみそなく郭公しけき歎の枝ことにゐて
四五月はかりに人のもとへまかりていと
また法師かたにことさきこえて
郭公こゑていぬるひとやらん我は別のなきことを

読人しらず

ひとりゐて物思ふ我を郭公ここにしもなく心あるらし
玉匣あきつるかたの郭公たゝ一こゑもあかすそこなか

五月雨のふりみふりみの世につゆしけり
数ならぬ我身山への時鳥来れともくれの初音はきこゆや
題不知
とこなつにさそへもらん時鳥しけきみ山よりなほふかかるらん
ぬるよとうしにまろそまひしき郭公なもしらぬよにあくるさ かなし
三条右大臣少将にねよ待ときこえしのいよかよふ
ところ待けるとうへのおもことともあるにへり
五月のあまあめそこしやまそて月にわかるるを
けふに後をめしへむとそ存しへく待けると
少将はかれくとふく待しさりけりまいあちや

をらひてなつしく世のとるいて道もあれ
あるし乃女
五月雨よなかあへつせる月かれははやふともみえ雲かれ
せこりて待けるへよ思ことの待そはつりし
きる よみ人しらす
二条のわつらひあつかひ侍しこの花を人よおもれ
はしらはす
足曳の山河あららさゆれわまはつと神をのこそ音
五月なるあめはしめしさつしのかえ待よけり
女のりとにまちえりなれと

女

遅しとなかむかしの時鳥いまは鳴きてそ昔かなしき

詠しらす

色ぬ花橘にかほらさす千世をかさせて思ひやらるゝかなり

旅ねして妻恋すらし時鳥神なひ山にさよふけてなく

夏の夜のふしかさき人の声をとめかねらむそこの人なけゝ

女乃りのかんよ陽り出されけつふところより

ころりふさかり来るにりのかとひかり

てはよつかりけり　俳諧

時鳥ころなかぬ声をとてそめておかぬともそれとおもふあつて

五月ふく待けるふしに待て

よみ人しらす

五月雨に待夜のなかめ小抱きひあつる我そまことひさ

女まいとしものひてりのいひてそりく

時鳥一こゑよあかる夜の明かつや何ふて如し華

詠しらす

ころなく声を鳴くてを空蝉むなしき恋と我はすかて

子をなき夜の草葉よそく露と命とたのむ蝉なかき

身へむくしさけき宿よも夏虫も思ふかふかなく人あり

空蝉の思さくらし抱そむ我もむなしき世ことはまうて

人のもとにつかはしける

在原卿平朝臣

いかにせんをくらの山の郭公おほつかなしとねをのみそなく

題しらす　　よみ人しらす

時鳥鳴くこの一こゑはかはらぬ世の中をとよそにもききけり

人しれす我しのふとこそかつはもさかなん時そまたるる

我宿のかきねにうゑしなてしこは花にさかなんよそへつつみん

とこ夏の花をしみれはうちはへてすくる月日のかすもしられん

常夏に思ひそめては人しれぬ心のほとはいろにみえなん

返し

色といへは花もうすきもたのまれぬ山となりてこそこちらもやは

師尹朝臣のまたわらはにて侍ける時とこ夏

の花をおりてつかはしけれはこのもとに

書て内侍のかみにつかはしけれは

太政大臣　貞信公

尚侍貴子　貞信公一女　延喜入文彦太子宮

天慶尚侍應和二薨贈正一位

なてしこはいつれともなく匂へともおくれて咲は哀なりけり

題しらす　　よみ人しらす

あきさこそ花ちりぬとこそなけれとわかまちさそちるらん

よなよなはもろこしになくなるかなしきはすまひをきかまくほし

夏の夜の月はほとなく明ぬれはあしたの間をそかこちよせつる

鵲のみね飛こえて鳴ゆけハ夏の夜わたる月そかくるゝ

秋ちかき夜をそてゆきハ時鳥なくこゑもちかきそされ

かつらのみこの螢をとらへてといひ給けれハ　敦慶親王　見大和物語

わらハのかさみの袖につゝみて

つゝめともかくれぬものハ夏虫の身よりあまれるおもひなりけり

読人しらす

天川のまちかからし夏の夜ハなかるゝ月のとまるまもなし

月ひろくまちふるありてゆふかほのさかりとも

せゝゆきてこゝろよりしのひくみのおくに

貫之

なとちかき時鳥へいぬるまて君かゆかすもよけれは

返し　藤原雅正

夏の夜ハたゝもとむとてとしのうち月ハをとこを思ひこめなを

読人しらす　　よみ人しらす　次

夏虫の身をたきすてゝ玉ならはわれとまれらん人やありてみそ

夏の夜月かけりしそく待けるかに

おもひつゝむる袖の露けさハ月のたちもやはしらん

みな月たつへしふかくにまかり出て月

のあかさをかんして　　右人六月中旬出河原游被　不限晦也

かも川のみなそこすみて照月をゆきてみんとや夏はらへする

みな月ふたつありけるとし

七夕のあまのかはらをなゝかへり後のみそかを
みそきにはせよ

# 後撰和歌集巻第五

## 秋哥上

これさたのみこの家の哥合に

よみ人しらす

俄にも風の涼しく成ぬるか秋立日とはむへもいひけり

よみ人しらす

うちつけにものそかなしき木葉ちる旅の初をけふそと思へは

りのといひ侍けるに秋立日人につかはしける

あめのした君はつれなく秋風はけふより吹ぬ我身かなしも

といふ事侍けるころ

いとゝしく物思ふ宿の荻乃葉に秋とつけつる風のわひしさ

題しらす

秋風のうちふきそむる夕くれはそらに心そわひしかりける

大江千里

露のおきしたりとおもふをもちたる物となき秋風のまさるなへに

女のもとよりなかき月ころにいひおこせて侍りける

よみ人しらす

秋萩を色とる風の吹ぬれは人乃心もうたかはれけり

返し

在原業平朝臣

秋萩を色とる風は吹ぬとも心はかれし草葉ならねは

源景明（大納言）にわすられて侍りける時よ
ふん月の七日の日かれかもとより
ほしそくてまうしてといひつかはして侍
りし

閑院

あふことは七夕つめにひとしくてたちぬふわさはあへすそありける（え）（け）

題しらす

よみ人しらす

あまの川わたらん空も思ほえすたえぬわかれと思ふものから

ふん月の七日にはまうてこんといひて侍
けるに雨ふりけれはえまうてこて

源中正 続薦 大蔵少輔當季子 近院右大臣孫

雨ふりてみつまさりけり天の川こよひはよそにこひんとやみし

返し　　　　　　よみ人しらす

水まさりあさきせしらすなりぬとも天のと渡る舟もなしやは

七日女のもとにつかはしける

藤原兼茂

織女もあふ夜ありけり天の川此わたりには渡るせもなし

うとまけりけるをとこ七日の夜まうてこさ

りけれは女のよみて侍ける

よみ人しらす

ひこ星のまれにあふよのとこ夏はうちはらへとも露けかりけり

七日乃夜人のもとより返しのこよひはいか

なんといひおこせて侍けれは

あひてあらんと思ふ夕暮は七夕つめもかくそ待らん

返し

多くひなきりのよは秘て嫉めさき七夕つめは人めやはかり

読不知

天の川なかれて恋しくはそてあつ衣と思ふせにやくらん

万

玉かつらたえぬ物からあら玉の年のわたりはたゝ一よのみ

秋乃よの心もしるく七夕のあへるこよひはあけすもあらなん

契りけんとせし葉はまちてんやわたりになれぬ逢瀬を

七日越後の蔵人に侍りける
在原あつゆき朝臣
あふことはこよひなれとも七夕にをとりやこふる人恋まさりて
七日　よみ人しらす
七夕のまたれしとまちよひきくらん人のつまなかりせん
七夕をよめる
万
ひこほしはたなはたつめとこよひこそあけまくをしき年にまれなる
天川岩こす波のたちゐつゝ秋のなぬかのけふをそまつ
紀友則
けふよりは天川原はあせななむそこゐともなくたゝわたりなん
そよみ　清輔　奥義釈之
家隆用そこゐ
よみ人しらす
天川なかれてこふる七夕のなみたなるらし秋のしら露
あま河せゝのしら浪たかけれとたゝわたりきぬまつにくるしみ
秋風は川音高し天河川のきみ渡らん月見そさ
天川恋しきせゝそてまちわたる瀬つなきこゝに袖ぬれつゝ
織女のこしといはれし天の川雲たちわたりまさりける哉
凡河内躬恒
秋のよのあかぬ別を七夕はたてぬきにこそおもふへらなれ
七月八日のあしたに
兼輔朝臣

七夕乃ゆきあひ天川舟をうけよかね涙をとゝめなん
ねなしんと　清しゆき
わさとゆてあつめやもらん七夕ハあかぬ別の空とおもへ
おもへと絶て　よみ人しらす
秋風のふけハさすかにわひしきハ世乃ことハりとおもふものから
題しらす
松虫乃初こゑさそふ秋風ハをとは山より吹そめにけり
業平朝臣
ゆく蛍雲のうへまていぬへくハ秋風吹とかりにつけこせ
よみ人不知

秋風の草葉そよきて吹なへにほのかにしつる日くらしの声
清しゆき天
日くらしの声さく山のちかきにやなれつゝなかは白露ん
よみ人しらす
日くらしの聲こそくられ松虫のなくよのよ人をまちわふる
心ありてなくなるもこゑつらし日暮乃いつまてを秋のかきそらを　過六
秋風のふくさとにひとこひしくそ草ねもしれ聲へなれかり
秋こそくもねやらむしき蛬乃やとりにこゑたえぬ
こゑもひしかりやるをめつ秋のよにかゝる松虫そこゑみたれ
妹の聲にさやかにつらく人をまつかな淡雁と松虫こてらなき人

秋風のやゝ吹しけハ野をさむミわひしき声に松虫そなく

藤原元善朝臣 宮内大輔季光子 中納言葛野麿孫

旅宿ハ聲りせよ虫のなかりせハ忍ひ乃やとを誰かきかまし

よミ人しらす

風さむミなく松虫の涙こそ草ハ色とる露となるらめ

秋風の吹しく雲ハ山かくし浪角ちかる音そきこゆる

これさたの親王の家の哥合に

壬生忠峯

松の音に風乃しらへをまかせてハ竜田姫こそ秋ハひくらし

秋大輔かうつまされけるころなる家に待ける

に萩乃葉にふみをつけてつかハしける

左大臣 小野宮

山里のものさひしさハ萩乃葉のなひくことにそ思ひやらるゝ

よミ人しらす

小野道風朝臣

わすれぬいふかひもなき花薄秋風にのミなひきやそてあらん

ぬすらのおとこふりのいひける女乃ひとりふ

つさそれしいまもとゝまらなりける

よみ人しらす

秋くれはゆりの面影とうせつなりとそかの月とそ姫ゆる

返し

心もておふる山田のひつちほは君まもらねと刈人もなし

題しらす　　藤原守文

草のいとにぬくしらたまと見えつるは秋のむすへる
露にそありける

後撰和歌集巻第六

秋歌中

延喜御時秋の歌めしけれはあつめてたてまつりける　　紀貫之

秋霧の立ぬる時はくらふ山おほつかなくそ見えわたりける

花見にと出にしものを秋の野の霧に迷ひてけふはくらしつ

寛平御時きさいの宮の歌合に　　よみ人しらす

浦ちかく立秋霧はもしほやく煙とのみそ見えわたりける

おなし御時のをみなへし合に

藤原興風

をりからに我名はたちぬ女郎花いさおなしくは花々にみん

よみ人しらず

秋の野の露にをかるゝ女郎花はらふ人なみぬれつゝやふる

花の色はたゝひとさかりこけれとも秋のよのおもひそへたれ

すゑの松まつことかさにたけるよ出ん帝の

わかみ続りけるわたりけり

近江更衣　源周子　右大弁唱女　生時明弁内親王三人

五月雨にぬれにし袖にいとゝしく露をきそふる秋のわひしさ

返し　延喜御製

大かたも秋はわひしき時なれと露けかるらん袖をしそ思ふ

亭子院の御前の花いとおもしろき朝露のをけるをめしてみせさせ給て

法皇御製

白露のかはるもなにかおしからんありての後もやゝうき物を

返し　伊勢

うへたてゝ君かしめゆふ花なれは玉と見えてや露もをくらん

大輔か後涼殿に侍けるに藤つほより女

みなへしをおりてつかはしける

右大臣　九条

おきて見る程さへあかで女郎花も露けきさまと今やしるらん

返し　大輔

我世よからん露と女郎花もなにはふとよりのゝこそあらん

又　右大臣

なさけおきす露のやどりへふれはまことにあらたなりけり

返し　大輔

今はなやうらとけぬべき白露の心をしまて世とや下紐る　人ゝ

あひたりて待けん女のかくしもなで待われしを

ひさしくとふらはぬ八月ばかりに女の

日のよりなといひつかはしたりしひざまずきて

待われて　よみ人しらず

白露のいつまでなきさめて萩の下葉にかくやとまる

返し　伊勢

心なき月は草葉にすえもおかぬに秋くる風にしもかゝらん

秋ところありとにつかはしけり

よみ人しらず

人はいさことそともなれなかなかこそ秋は露さへ物を思ふらん

人のかれ行ておもひけるいとたゆきとつかはし

ありけるは思ふ草葉にまよへる

中宮宣旨

花薄ほに出ることもなき宿は昔忍ふの草をこそみれ

返し　　伊勢

宿りせし人なれつゝそ我は見ん花はなにやよそ人や忘ると

題しらす　　よみ人しらす

秋のよをいたつらにのみおきあかす露は我身のうへにそ有ける

大くふかく白露もいまはおきゐてこそ見んと有けれ

右大臣

露ならぬ我身と思へと秋のよをかくこそあかせおきゐなからに

秋のころおひある所に女とものあまたすたれの
うちに侍けるにおとこの哥のもとをいひいれて
侍けれはすゑは内より

よみ人しらす

白露の奥にあまたの声すれは花の色〳〵有としらなん

八月なかの十日はかりに雨のそほふりける
日をみなへしほりにまかりて藤原のまさたゝの朝臣の家に
いたしてまかりてかへりつかはしける

右大臣

暮そ月色時も女郎花も雨やめてとは思はさらなん

題しらす　　よみ人しらす

秋の田のかりほの宿のにほふまて咲る秋萩みれとあかぬかも

秋のよのあくるもしらすなく虫はわかことものやかなしかるらん さらけり

これの花をおりて人につかはすとて

時雨ふりぬるまには人よみをよめはちらねはおしき秋萩

秋のよとてよめる

つらゆき

おりてみてそらんかなく康なからす野への秋萩

むねゆきの朝臣

我宿の庭の秋萩ちりぬめり後見ん人やくやしと思はん

よみ人しらす

白露のおくはおしき秋萩をおりてはさらに我やかくさん

らしめつゝまさけらすとうたこれはかなくゝてふ

つらゆき

秋萩のいろつく秋をいたつらにあまたかそへて老そしにける

天智天皇御製

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我衣手は露にぬれつゝ

よみ人しらす

我袖に露そをくなる天川くものしからみ浪やこすらん

秋萩の枝もとをゝになりゆくは白露おもくおけはなりけり

わか宿におはなかうへの白露をけたすて玉にぬくものにもかも

延喜御時哥めしけれは

貫之

はなすゝき乱てすゝきの秋萩にをきける白露我もけちなむ

秋の野乃草はいとゝもみえなくにをく白露を玉とぬくらん

文屋朝康

白露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉そちりける

壬生忠岑

秋の野にをく白露をけさ見れは玉やしけるとおとろかれつゝ

読人しらす

なくらにちくさみたるゝ小萩の枝と白露とのこる人のよそ見ん

白玉か秋の木の葉にやとれると見つるは露のはかるなりけり

秋の野にをく白露のきえさらは玉にぬきてもかけて見まし

うつ夜袖くちてまてなく露は我身と秋の野とやかるらん

大空に我袖ひとつあらなくにかなしく露やわきてをくらん 清本ひとつ 家本ひとつ

物ことにをく露袖によりけしあて世はおほき河ならぬそかし

秋のことゝてのあり

ゆきやす

秋の野の草もわけぬを我袖の物思ふなへに露けかるらん

ゆきやす

いく世へて後かわすれんちりぬへき野への秋萩みかく月よを

よみ人しらす

秋の夜の月の影こそ木の間よりおちは衣と身にうつりけれ

袂よりも月の光は旅ねにてまひかりぬけとみえけり

秋の夜の月よりさきなる雲はれて光さやかに見るよしもかな

小野美材

旅の池の月のうへにて雪れはかつらの枝よりさやけからん

恵慶

秋の海にうつれる月を立かへり浪はあらへと色もかはらす

是貞のみこの家の哥合に

よみ人しらす

秋の夜の月の光はきよけれと人の心のくまはてらさす

あきの月てふかくてすめる独あかしやとふる井にみすまされまし

八月十五夜

中つかさ 右京雅正

いつとても月見ぬ秋はなき物をわきてこよひのめつらしきかな

よみ人しらす

月影はおなし光の秋の夜をわきて見ゆるは心なりけり

月をみて

紀淑光朝臣

空とほみ秋やよくらん久方の月の桂の色もかはらぬ

貫之

衣手はさむくもあらねと月影をたまらぬ秋の雪とこそみれ

よみ人不知

天川しからみかけてとゝめなんあかすなかるゝ月やよとむと

秋風に浪やたつらん天の川わたるせもなく月のなかるゝ

物くもしはおふらんそこれてまつりみちくとおきまさりける

深やふ

さえくりなく秋の夜こそ海の月のよみちなりけれ

よみ人不知

吹風にふかきたのみのむなしくは秋のこゝろをあさしとおもはん

惟貞のみこの家の歌合に

秋のよは人をしつめてつれつれとかきなす琴の音にそ泣ぬる

露をよめる　　藤原清正

ぬきとむる糸しなけれは白露のちくさにかける玉をとひなし

八月十五夜

秋風にいとゝふけゆく月影をたちなかくしそ天の川霧

延喜御時秋の歌めしけれはたてまつりける

貫之

女郎花匂へる秋のむさしのはつねよりもなほむつましきかな

人につかはしける　　かねすけのあそみ

妹かりとゆくは道女郎花ちよまつへやわれとしいへは

題しらす　　よみ人しらす

女郎花草むらことにむれたつは誰松虫の声にまよふそ

たゝうへもちるみくほ過と妹のよる月の光にもたくれて

女郎花花のさかりに秋風のふく夕暮を誰にかたらん

貫之

白露のおきにしきて女郎花もはなきる野へにまそこそひねりけれ

花にしかへはしろそてたのまん女郎花も花の心ひとくとも

みつね

七夕はけふたなはたにあらねとも秋よりさきにあふ時もなし

よみ人不知

秋の野にたつやなれ女郎花ものこそのこりとひかけて

女郎花もうつろひ松虫とりとやとして誰とかへん

前栽よみてまつる一品ありけるまて

女郎花匂ふさかりを見る時そ我老らくはくやしかりける

をとまねれちりあらしの暮つかた女郎花をおりてかつしれ見ることのはしにさしすとて

三条右大臣

をみなへし花の名ならぬ物ならはなにかは君かかさしにもせん

[せん]

ひろあきなれむかしめにせしそこかはし給ひしを女

なかにならしなとかくゆかさねあひさへに給ひ給

法皇のいせか家にをはしまして一とめしけれ

よみてまつるとてさして

枇杷左大臣　仲平　兼左大将　昭宣公二男

女郎花折けん袖のふしことにすきにし君をおもひ出やせし

返し　伊勢

をみなへしおりもおられすいにしへをさらにかくへき物ならなくに

後撰和歌集巻第七

秋哥下

題しらす　よみ人しらす

ねちそ海さらへのやまちかき時雨はまよひそあつゝ
秋風にあひとしあへは花もさきいつまてとかはふにそ出けり

寛平御時きさいの宮の哥合に

在原棟梁

花薄そよともすれは秋風の吹かとそきく独ぬるよは

題不知　よみ人しらす

もとくさかは出やらぬ草のはいろ小なんとたのまれぬよ

秋風にさそはれ渡る雁かねは雲ゐはるかにけふそ聞ゆる

こしのくにゝはふ人待けるときなり

清原中宗

旅のよにかりかもなきて渡るなり我思ふ人のことつてやせし

題しらず

秋風にきりとひわけてくる雁の千世にかはらぬ声きこゆ也

よみ人しらず

物思ふと月日のほともしらさりつ雁こそ鳴て秋と告つれ

やまはそよにかゝりけるつゝふ

雁かねの鳴つるなへにから衣竜田の山は紅葉しにけり

題不知

秋風にさそはれ渡る雁かねは物思ふ人の宿をよかなん

誰きけとなく雁かねそ我やとの萩か末をとほそへて

わかてことゝも猿かやくる旅とにゆくとなく

秋ことに渡る雁かねたのまねと思ひあてつゝわかまな（まなく）（鳴）

思ふさまにはあらねは小雁の渡るへりくとをを鳴渡る

人の雁にはなかりけれはとさて

みつね

年ことに雲路まとはす雁かねは心つからや秋をしるらん

風まにはさかりけるとのかりかにけれとも

よみ人しらす

天河霧そたちわたるかた山の木葉はむへもみちにけり

延喜十三年左少将廿七才延長八年十一月従三位十九年中納

兼輔朝臣近中将

はむさしむへよゆかり見月日みえねはにさかりと
ありてかりにたなしつゝさのかねよそもち
つよゆりておまとより漏月とへしていひと
くり給けり

藤原忠房朝臣

秋霧はけさの霧と見て河への山のりて来そ哀さ

在原元方

よみ人しらす

いそのかみふるのみち草を雉の音と見しにはあらなれ

よみ人しらす

秋の野におくしら露はもみちにかせふきし霧はおきしとも
秋の野にいかなる露のおきつらむちくさの花の色のかはれる
いつまてか見てしのはむ思ひつゝ秋のよにうつろひとてみる草

紀友則

こゑたてゝ鳴そしぬへき秋霧に友まとはせる鹿にはあらねと

よみ人しらす

ゆきさけと思ひけるにこゝろみのかなしき夜を独鳴らん
うらみつゝをもとそたのむ庭の松色よる秋の風よりふ

在原朝臣

初時雨ふれは山へそおもほゆるいつれのかたかまつもみつらん

深養父

いとゝもしらく心むもふしと立田山いまそしみちれ錦をりかゝ

稲葉そよさむくさかりの露なし立田の山をりきなる

君ゆくと旅すとなるか立田姫もみちそむとや山を染

源宗于朝臣

あさからぬいろさの山は秋霧のあさるとふやまたはれけん
ちらかしとちいはぬをしとう待らん

よみ人しらす

君と我いりせの山を旅なれはいさなかりける物まそさけ

まいしらす　りとゝ

たそかれくらく見はつる山の紅葉はいそとれさそへる露やたつらん

立田山をこゆるとて

友則

かくはかりみはてぬ色のかはれるや錦をたちて山をこふらん

読しらす　よみ人しらす

こし夜半の風の山のもみちはて拂ふ人のたりともなし

かつ山をこゆるとて

貫之

足引の山の山もりもる山も紅葉せさする秋はきにけり

よみしらす

ら錦立田の山も今よりは紅葉なからにときはならなん
かゝ衣る河田の山のもみちてはきくのもちる錦ぬきかけり
人くりかへしとも小さ(?)てゝとまる(?)みちよ山の
りまちとこれかまてよみ侍ける
貫之
いつ木もとえ見えし見えし ○秋山の紅葉の下小さまにそ よそ
題しらす
よみ人しらす
秋風のふきにし山を錦よるへ錦よれりとへ志の
なとかは秋とともに唐錦立田の山の紅葉すらよと
あきなりと我は見なへ小紅葉をとる旅志なかれ

つらゆき
玉かつらかつらき山の紅葉は面影にのみ見えわたるかな
秋霧の立ちかくせはかりみちてつかはしける
く見ん山をとこゝろとて
そせい法師
鏡山やまかきくもりしくるれと紅葉あかくそ秋は見えける
となりに住み侍ける時九月八日伊勢か家
の菊にわたをきせにつかはしたりけれは
又のあしたをりてかへすとて
伊勢

数しらす君かよはひをのへけふなかきやとの露と菊

返し　　藤原雅正

露なからをりて宿の菊なれはちよのかすやはよみけん

九月九日清のなくなりにけるに

伊勢

菊の上におきゐる露の人をもあはれに世のつねと露なる

題しらす　　よみ人しらす

さくなへもなかの月とはさためてはひさしき秋やたつらん

なかに秋へはなかの月とは君かためこその菊は色へをそふ

わかの菊をとらしつゝ

成ぞと別てけふの菊のもろひかしてそ白きへらあれ

秋とこのひさしら降りてこけふまけれは

ちかてきくるそめし人白きらん菊りてそやと君そこなよ

月影よ紅葉の色もかくて

紅葉の散くるれは長月の菊の月のくもなし

題不知

そらにてさけれは秋の山とは世にさてふしきあらん

なかさりに蜘の山へとくえれはおもねぬ錦をさかぬ人そさき

紅葉をとけつゝゆきは錦さそ成よ残りとへやみらん

[illegible]

ちりまかていさまれりこゝ鏡山こえて紅葉ちりしは老え

よみ人しらず

山嵐のふきしまにふく紅葉はみをもあれなる小萩かな

秋のよの小萩ところこえてふりつる風によそほひし紅葉哉

立よりてみる人のあまたはら秋のよの錦をくらめ

木のはこそおもひぬ錦のつまとりはいろもみなやしの紅葉なり

嵐よちる紅葉は世部花宿によりしくみつきなかりけり

是曳のふ山風のみちは萩によそおりおしのさきよみてほし掛と

紅葉みなふりしく秋の山へそちりてにしきの錦かくれ

立田川いろくまとなかにかたり山の紅葉そ今はちるらし

貫之

立田河秋にあれは山ちかくなかるゝ水も紅葉しにけり

よみ人しらず

紅葉ゝのなかるゝ河は秋はいろもおほく錦おりふとへやなかるらん

立田川秋はみなおほくおほせなむかたらぬ紅葉みなかるゝはな

文屋朝康

浪の上にみえてはもみち葉のさゝかなかるめる紅葉かなやと

右京具風

あきはあまのうらよせたる浪の上は紅葉によそもはなきちりけり

よみ人しらず

わたつ海乃神よたむくる山姫のぬさをそ人は紅葉といひける

貫之

日くらしの声もいとなく聞ゆるは秋夕暮になれはなりけり

よみ人しらす　次

風の音にみえきりと秋やせまりつらん吹くことに紅葉ちりしき

紅葉ゝにまさる夜の波まに月乃影そらふる人へなし

あひおもひて侍けるおとこのひさしくおとつれさりける

わすれなしなる月をりにつけてしきつ

右近

大空乃妹の宮あるにまとひしきに物思ひそふる君をこひけり

もしらす

よみ人しらす　次

我とく物思ひきし白露乃おきゐていくよにおきさわかて

あひしりて侍ける人のゝちくまてこす

なりよかれにけるおとこのおやこさてかへすとて

つまとふとやかをし人へやとさてのちに使りて

こさうりきけれし

平伊望朝臣女　大納言天慶二年薨

秋ふかくよそのみきく白露のたかことのはにかゝるなるらん

かへしよけるおとこ乃娘よりきたるに

昔の兼香厳れおこき

さふとも秋ときまれは雲ゆかりにや我を人のあかあし

紅葉と色こそみえしくと織女のわたりにつかりて
みかりのとよふ
君こふと涙にぬるゝ我袖と秋の紅葉といつれまされり
題しらず　よみ人しらず
照月の影しもとにさやけきハちりのみちるとところを見なれ
故実の国経に兼輔朝臣のひくかよりし侍
けるみやとりてささつまて国経よおくりけり
なりと秋月さかりちると紙にけん遣しけるなまこの枝にさして
秋やこなたつ秋ハまことこれ梢さりし侍従
さ藤の当たまわり侍りけれ

源融
あからめハみるへき梢を惜めハそこはかりにや隠てゆくらん
菊乃花を植ましとて人のいひ侍れハ
よみ人しらず
いつこにも露よをきなむむらとても色もかはらぬ人やおもはん
月のなりそぬとおもひなけきさ侍けるに紀
友則かりとよりいふとひさしくせさせ侍れ
もをるのふさくの花折てつかはしける
藤原忠行
枝も葉もうつろふ秋のもみち見れハはてはかけなく成ぬへらなり

返し　　　友則

しつくもてよはひのふてふ花なれハ千世乃秋にそかけハしけらん

延長御時秋乃哥めしありけれハ
てたてまつりける　　[illegible]

秋の月光さやけみ紅葉のおつる影さへ見えわたるかな

題しらず　　　よみ人しらず

妹とゝいつゝとをまつあたのいつまてかとふしさかえん
おとこの花かつゆかんとて菊おりとさく
雨よそひ濡つゝもしらすわかれハもよくるへて
つりける

みな人ハおもひしりとや菊の花ちるなかにそ露ハおきける

題しらず

吹風に雨ふりすさふ妹かやの月の上よりふるらん

紅葉乃ちるをつりの木ありとみて
紅葉ハちりの木ありとつもりて色やいつもそめらん
三室山けふのこの紅葉をおりてそくり
詠りたれし

思出てとふ人かおもし妹かやのみまかりとみせらめん
なる月のことしまれ日りみちよひたそつまて
おこせて詠りたれ　　ちらぬらむをめ

宇治山の紅葉をみんとまかれりしか長月の晦の日をとゝまりてすまて
九月つこもりに　つらゆき
長月の在明の月ハありなからはかなく秋ハ過ぬへらなり
はかなしくすきにける秋
凡河内躬恒
いつ方によハなりぬらんおほつかなあけぬかきりハ秋そとおもハん

後撰和歌集巻第八
冬哥
題しらす　よみ人しらす
在秋下従平門
初時雨ふれハ山へそおもほゆるいつれのかたかまつもみつらん
まつ時雨ふりにしよりハ山の梢あまねくうつろひにけり
神無月ふりみふらすみ定なき時雨そ冬のはしめなりける
冬くれハさほの川せにゐるたつもひとりねかたきねをそなくなる
独ねの今宵さへに神世月かれにも見えぬ初しくれかな
袖そて時雨ふりぬる我なれハちるとも見しを惜からん
吹風ハ色もみえねと冬くれハ独ぬるよの身にそしみける

秋はてゝ我身時雨にふりぬれはよのなかさへにあらしふくなり

神な月時雨ふりしてゆきさそはなかりけれは

神な月しくれとゝもに神なひの森の木のはゝふりにこそふれ

女につかはしける

たのむ木も枯はてぬれは神な月時雨にのみもぬるゝ比かな

山へいるとて　　増基法師

神な月時雨はかりを身にそへてしらぬ山ちに入そかなしき

神な月はかりに大江千古かもとにまかりたりけれは

まらうとあるしともにあかれともにゑひてまかりけり

雨ふりてこそまうてきたりけれ

紅葉ゝはおしき錦とみしかともしくれとゝもにふりてそこし

藤原忠房朝臣

返し　　大江千古

もみち葉も時雨もつらしまれにきて帰らん人をふりやとゝめぬ

題しらす　　よみ人しらす

神な月かきりとやおもふ紅葉ゝのやむ時もなくよるさへにふる

子をやめら神な月山のもみちは時雨にいろもかはりけり

すまぬ家にまうてきて紅葉にかきていひ

つかはしける　　枇杷左大臣

人もなきねおましゝら宿とさへてみれはとそ木の葉の錦なりけり

返し　　　伊勢

涙さへ時雨にそひてふるさとは紅葉の色もこさまさりけり

題不知　　　よみ人しらず

冬の池のかものうはけにおく霜のきえて物思ふころにもあるかな
おやのかりにまかりてとくくまうてけるに
かへしきこゆ　　　人のむすめにやつかはしける

神な月時雨ふるにも暮る日を君まつほとはなかしとそ思ふ

題しらず　　　よみ人しらず

身をわけて霜やおくらんあた人のことの葉さへにかれもゆくかな

冬の日人につかはしける

人しれす君につけてし我袖のけさしもとけすこほりけるかな

題しらず

うちはへてあまりふりしけ白雪としけり庭ともに人のみえく
神無月しくれて河そみよしのの山のみ雪もふりしきぬめり
と鶴の嵐さむくもなりにけり是乃山のゆきのとまりてそ
ちるにもまさる物はなき初雪とおもはれそ
霞にかくれし山の里にさひしさにあかてゆくに人の
子やあき神無月よりしくれ我身時雨にふりぬらん
武蔵野のみちのひてかよふ所はけるを
のちく雨ふくならぬけれはかりしよ

秋冬のみたれりとこの頃はいつふそとか
つもれは梢のかゝりとしはさんか
白山に雪ふりぬれは跡たえていまはこしちは人もかよはす
雪のあし毎花となりけるて
みつね
降そめて友まつ雪はむはたまのわかくろかみのかはるなりけり
返し　兼輔
くろかみの色ふりかふる白雪のまちいつる友はうとくそありける
又　つらゆき
くろかみと雪との中のうきみれは友かゝみをもつらしとそ思
返し　兼輔朝臣
としことにしらかみの数をますかゝみ見るにそ雪の友はしりける
題不知　よみ人しらす
年ふれと色もかはらぬ松かえにかゝれる雪を花とこそ見れ
霜のうへの枝にふりしく白雪は消ぬかきりは花とこそ見れ
わかそ今はこしちをみれは山の端につもる雪こそさえてね
秋をさむくねさめてきけは道にそ鳴なる雁もあやしき雪や
雪のとこしぬるの清女まつらしけり
藤原けりと
ふきえてわれにかくれてわかは雪ふりつもる人の心なきなり

天慶七 叙爵 天徳に中納言 安和二大納言 天禄元薨

師氏卿のもとにして家の前よりゆきかゝり
けるとききて　　よみ人しらす

白雪のふりしきてこそそこはかとなくところたかりとまくさらん
詠人しらす

とゝひはくねなくふかくのみゆきの神のやしろはいと寒さも
おほ玉の年をまもりてかつゝ今は積りつむ雪の消えぬ白山
ゆきも降りてはよそにみかへりのふるさとにいまは小笠（笠）
白雲乃たなひく山とみえつるはふりつむ雪のさえしなりけり
庭の雪はむもれそ積りつゝあらむ我ともなりぬさえて
なつれゆくみこゝろのあるをさやなとこえ草の根ともめぬ

心そこにみかくそわかめ白雪ハいつまてか我のちかにぬる
天の川冬はかよひとたえもやりまに淡つもたえもせぬ
なかしき雪のふりては我宿の杉をと思ひてとふ人もなし
冬の池のみなそこまてもあらはれてはさむかるにいそ世のなか
山ちかくめつらしけなき松の雪のきえてやなんとつもるらん
松乃葉にかゝれる雪のそれをこそ冬の花とはいふへかりけれ
梅の雪は消ても色しるしとはいふらん花も紅葉もまたなかりけり
降雪はかつそ消ぬらし足引の山のたきつせ音まさるなり
瀬川月なくいつりの関はあまたとおもひけり旅ゆく方のしるし
ふる雪は梢にふ積もなをとらめや流れもなくて消ぬいつかそ

よるは月とそみゆる秋霧の庭しろくひとへにぬりつもる雪
梅かえにふりをける雪を春ちかくめ風ちらしけに花とそみゆる
雪ふりて年のくれぬる時にこそつゐにもみちぬ松もみえけれ
やよひの山の桜も秋のこすゑのこゝに春を待らん
色ふかくありつむ雪をみる時そこゝにはなをこそむかしちすら
年暮て春あけかたになりにけるは花のかけ侍るにまよふしら雪
春ちかくふる白雪はなをしも山にこそ花は待らるゝ春
古今
冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな
新年のはしめにもあらまほしく鏡みなけさそよそれぬとこそは
むはたまの夜のまの白雪は照月影のつもりかなと告り

この月の色のあまりにはかくは雲ゐをやはらそてしらまほし
冥こゆみちたえに日まちかなる年にさはりて春を待かな
見えしけ殿別当よはをつくしひとはよりね
けれとえあへすしてそのとしの志はすの
つこもりまれ日はゝかりつけゝ

藤原敦忠朝臣

物思ふとすくる月日もしらぬまにことしもけふに
はてぬとそきく

後撰和歌集巻第九

恋哥一

かゝりしてあひしりて侍ける人にはゝむと
ありてあひかたく侍けれは

源宗于朝臣

東路のさやの中山なかなかにあひみて後そわひしかりける

しのひわたりける人よりのちうらみし侍ける人と
人のほかにして侍れとはゝかることありて侍れ
ありしけれ

清原中正

暁となにかいひけんわかるれはよひもいとこそわひしかりけれ

源のおほきかゝよひ侍けるをのちのちはまか
らすなり侍けれはとなりのかへのあなより
おほきをはつかにみてつかはしける

するか

まとろまぬかへにも人をみつるかなまさしからなん春の夜の夢

あひしりて侍ける人のもとにかへることみんと
てつかはしける

元良のみこ

こやこやと侍夕くれと今はとてかへるあしたといつれまされり

返し

藤原かつみ

夕暮はまつにもかゝる白露のおくるあしたやきえははてなん

やまとにあひしりて侍ける人のもとにつかはしける
よみ人しらす
うちかへし君そ恋しきやまとなるふるの早田の思ひ出つゝ
返し
秋の田のいねてふことをかけしかは思出るかうれしけもなし
女につかはしける
人を思心はかりはそれなから我はわれにもあらぬ成けり
はゝかる所ありて侍けるを又あひしりて
侍けるおとこよりとかくいひ侍れは
世にあるとなん思ひつるといひつかはしたりける
伊勢
思ひ川たえす流るゝ水のあはのうたかた人にあはて消めや
題不知　三統公忠
思やるこゝろはつねにかよへともあふ坂の関こえすもあるかな
女につかはしける　よみ人しらす
消はてゝやみぬはかりか年をへて君を思ひのしるしなけれは
返し
思ひたにしるしなしてふ我身にそあはぬなけきの数はもえける
又いひしけるを
かゝてにおもふへきなから衣かへて彼乃世にあけれは

よとゝりにおなしま川の辺にれいそこなりけるとみなそひき
我とくなひしふ人の音にハふるきさんともひなりさり
よしとく我松山にはまなくてこゆる浪にあらて袖ふ

女のもとにつかはしける

ひとゝはとなりきり下ひもとけぬにふるれんとこへハ
むすひをきし我下ひもの今まてにとけぬハ人のこひぬなりけり

女のもとへ人のけさうしけり
かゝる世ハふくなりし飛鳥河昨日の淵そ我身なりけり

返し

淵瀬ともいさや白浪立かへり我身ひとつハよる方もなし

題しらす

光まつ露に心をおける身ハ消かへりつゝ世をそうらむる
おなし所にあふかんとなんいひける人のもとにつ
かはしける

志かすかの海ときけはやよとゝもにみるめかなしきとしのへぬらん
あつよしのみこの家にてさふらひけるとおもはれ
して人しれす文のおくにつかはしける

桂乃みこ

から衣きそへたりしはみすかへし衣とさらにかさねらん
おひまちける人ひさしうせしそこなりき

いひつかはしける　こまのめのと　陽成院御乳母

り老ふをみえすなおもひ山のかひはおさへかたく又もやなきは

返し　平定文

おもしてふことをゆかしみ山の井はあさしかりにはまみねと

題しらす　よみ人しらす

いくたひかいく田の浦に立かへり浪に我身をうちぬらすらん

返し

立かへりぬれてはひぬる塩なれは生田の浦のさかとこそ見れ

女のもとに

あふことはいつと雲ゐの大空にたつなのみしてやみぬはかりそ

返し

よそなからやまんとも思ふあふことはいまこそ雲ゐはるかなるらめ

又をとこ

今のことたのむなれとも白雲の峰はいつかは人をすまん

題しらす

かへまことを思ふ人にふれは涙の雨はふりんともそらゆかぬ

あさふかく見んことをそ思ふてんのとこにわかよふけん

みちのおもひそておもひ捨とすまむのこしてこゝろによせ

女のもとにつかはしける

柏木の花のんはらかて時なれはけり身とそうらむ

返し

おふそちかとみゆめ春にあふことをかひある花の心をと

そのかみに帰らんとそりのかまうりにきる人の

われともなくしてこれはとふれてつかうしけり

みんとおもひ月日をまつ淡路の山かせにのみ惜ふる

よみ人し

月日をもかそへけるかな君こふる数をもしらぬ我身なりけり

女まうしたへく心はしあつかりしのあひ

まかりけり女かへしとしにまちくらせと

たのめけるをすきしもくれてかくる春まて

在中将

ひとつまちにて侍れと

このめはる春の山田をうちかへしおもひやみにし人そ恋しき

心さしありとなからえあはす侍ける女のもとに

つかはしける　贈太政大臣　時平号本院

はなとくもわひぬれは白玉の涙も春はいろまさりけり

返し　伊勢

人こふる涙は春そぬるみけるたえぬおもひのわかすなりけり

おとこ侍りしにこふかうひさしくかよはておかくて

つねにもたえすいひけるを女さすかにえにも

なかなかあらぬことをいひて侍ける男のもとに

源氏のむか女　判

はしともいくらもみん時鳥わか宿ちかくなくは忍まて

返し　　おつよしれけんて

星ともにおもひそまされ郭公まつみかさこめぬ君か名をそて

えりてかへさ女をとひけてつゝしむ

表道のはしき

数おもしぬけん山ゝれ乃時鳥人の生まぬ命をなきつゝそする

いとこのひあか女よおひゝひくのちへ

めふはしけんく又何もかくて給れし

これ西の見んて　是忠

おふとのこゝろそとは忍ひあて玉ぬきとつりかはしよりかへん

女のもとより忘草をみをとはきてをこせ侍けれは

よみ人しらす

忘ふらひふものゝはなとしるれは忘草世のをやはかりね

返し　　西のふのこゝろふ人

うくみか我は忘れてあれとよまた忘られ侍ひそまけは

平定文かりとよりなか山のこゝゆかん使かると

いはきより給ひしは　左大

消ぬらはしかのめかてふおまえの月はなかふかゝおれはのゝ見をもよ

返し　　定文

君をとふ夜さへ人は流の雨かありえみしゆく我やなは
はかなくなりにける人はつゆしきか

## 伊勢

いそく心ひとつを持さへよろこひも流くも還てみえん
歌しらす　よみ人しらす　波
ともまれは玉まくらしまみす読人のまかりしとみつそなき
志のひあら人には流かそしけり
いせ山谷の下かちらしのひ人の見んあまはなかれてそふる
人をあひ志りて後ひさしうせしそこつれ
流つまけまし八

うまて君にか君かたのみしとのちくかさにかふるみをそ経ぬ
歌しらす
善イ
我やらぬ山路よ秋よはあまつ衣かさ露そとふれけり
身はなやくなる我と恋にしと恋しきともまこともなりけり
住吉の浜の白浪よりくはあまのかそめ小見ひそ能さ
君こふとぬまほ袖のかなはおもひのかは消し八は出けり
あはさり時いつはしをとそうたくはま我まくもみちは恋さ
世中に思ふつ恋の見ひしきはあひて後のなかきそかり
恋をみつねよするれ嵩れは梅の移よ付を名ぬ日暮
君により我身そつらきされのみなきは恋と思ゆやは

おとこのはしめて女のもとにまかりてあしたに
小雨ふりけるにつかはしける
今そしるあかぬ別の暁は君を恋路にぬるゝものとは
返し
よそにふる雨とこそきけおほつかな何をか人の恋路といふらん
はなれて侍けるおとこに
あふことのゆくへもしらすはかなくもたのめる心からそよ
返し
うらみしなりなんはやしぬるそにしふしとはおもはぬ世
思ふ人侍ける女よりのたまひけれとはまかり
りけるまたはへりける書
思ふ人思はぬ人の思ふ人思はさらなん思ひしるへく
返し
本柏のりもあれは下葉風をやゝ人のみけさいはおひもせむ
おとこのもと女むかしをみんてもおやの家より
ゆかりつかはすとて
別ては恋しき物としりなからなほうしろやすきをしかりけれ
題不知
なさけなむかへりてかはりけるされは心をまてとも君をとふ
身をすけてあしまかりてそしたかふ人は恋とはいひける物を

雲ゐにて人を恋しと思ふかな我はあしへのたつならなくに

人につかはしける　　源ひとしの朝臣

中納言希男
参議右大弁
天暦五年薨

あさちふのをのゝしの原忍ふれとあまりてなとか人の恋しき

兼盛

あやまたぬ玉の数思すまて恋しきことのまさりつゝあれ

ころ見しとさやにさこゆる人なりといひ

くれとも　　よみ人しらす

伊勢の海にとしへてもまけるたくなはの長き心は我そまされる

人につかはしける

色に出て恋すてふ名は立ぬへき涙にそむる袖のこけれは

くらうとのとしより世はよるいとゝそてあまたの露はさまと

おひをみむとおもけるをあすなん時とふとて人そ来なしらぬ

こひつゝもまりなきのうちにをしむ月はかゝるそ恋き

女のもとにつかはしける

ますきよきふるきなりせはなにはかは見えとうきよをもせん

み上に袂のひかる涙川うきそも人とうちそれかれけれ

返し

おりつけるの袂さへそうちしめきそふりかゝけのみてねそ

大輔につかはしける

右大臣

色ふかく思ひし袂のいとしく涙にはへをこゝ悔しかりけれ

題しらず　　よみ人しらず

見る時はことぞともなく見ぬ時はことありがほに恋しきやなぞ

おとこのこんとてこさりけれは

嵐枝のいさゝも待たされたの思ひ人を待ちとひより

おしめて女のもとへつかはしける

頼ことなくせられ山おもはゝ頼みしくも思ひゆるさめ

女につかはしける

人の上のことにしいはゝ忘れなむ君も恋しからん思ひそ立

返し

流れては思ふ心につかはし流れあきらぬ人とこそ見んとも也

女につかはしける

人言を思ふんは思ひまれなるといふことになぞくゝはれ

おとこわすれ侍りにしにつかはしける

あかずして思ふ心になりはゝをとおもふらんとは思ふらんやぞ　　中務

返し　　源信明

恋しさを思ふ心とくらべてはに秋月ともそて君こそ恋しさ

ゆかすなりにける女の人よ為立又かれた

[illegible]しける

さゝかへあくふちりみつ花ちいとれいの松風をとやみね

返し　　　よみ人しらす

住吉乃我身なりせハ年ふとも松よりほかの色を見ましや

おとこにつかはしける

うつゝをも花かさくとのおもやしきさハ梅かえに葛風なきぬらむ

女乃かたにす侍けり

白浪のよる〳〵岸に立よりて寝もみし物を住吉の松

おとこに侍りし老ぬ

まつ人をてかねまてもとのもとのふるされたいふ

あはれなりけり

# 後撰和歌集巻第十

## 恋二

女のもとにはしめてつかはしける

藤原忠房朝臣

今まては思ひもおなし物をまたにこそそれそなりけれ

壬生忠岑

独のみ思へハ苦しいかにしておなし心に人をなしてん

紀友則

我心いつならひてか見ぬ人を思ひやりつゝ恋しかるらん

まらうしわりなくつかまつりける女につかはしける

源中正

兼とわかふらいくね花なきさ下の心よむなむとなけや

人をいひわたしむとて

兼覧王

逢事の山下しけくはふ葛見てこそ我としらずや

とし月をへて思ひていひわたりける人

忠房朝臣

くれぬまも思ひしものを秋の月おそれぬ月とやしらまほし

女のさうしにかきつけてもちてまかりて

いひてのち

藤原輔文

あふことはなかりしものをと思ひつつよそにぞありける

みゆるかはせともぞなりなむもせさきけり女のもと

にいひつかはしける　よみ人しらず

ほのかにもいはゞなかなかいつてみてぞおもひやむへき

人のもとにつかはせりけるとし

本院右京

ともかくもいふことのはの見えぬかないづらは露のかゝる所は

返し

橘敏仲

ことのはをおきてかなる涙川おりたちてこそぬれ渡りけれ

返し

大輔

淵せとも心もしらす涙川おりやたつへき袖のぬるゝに

又 いらへなり

心みに猶おりたゝむ涙川うれしきせにもめくりあふやと（なかれ）

わさとにはあらて時々物いひふれ侍ける女
の心にもあらて人にならそ侍てはへりけるを
まいとのかもれにかきつけてつかはしける

藤原敦忠朝臣

かつきえて人の心を白露のをけりのとゝもたのみけるかな

あひしりて侍ける女をひさしくとはす侍を
まいといてしかんなりひ侍と人のつま侍られし

藤原敦忠朝臣

芦鶴の雲ゐにわひてなく声を聞のはるとそ我は泣かる

みなよりしける女の人にあひぬときゝて
つかはしける

平時望朝臣

かくはかり淵のふかき世とは知らて人をたのめし物のかなしき
れとこれこゆつまけまはいつはりしける

小町かあね

わか門の一むら薄かりかはん君か手なれの駒もこぬかな

題不知

枇杷左大臣

世とゝもにあはぬと消ぬる身はゝ望はいつかとそ数まさりける

返し　　伊勢

よし河淵とたのめしことも瀬になるは我そわか身の頼

人のもとにつかはしける

源ひとしの朝臣

東路のさのゝ舟橋かけてのみ思ひわたるを知人のなさ

人につかはしける　紀長谷雄朝臣

ふしてぬる夢路にたにもあはぬ身は猶あさましきうつゝとそ思

女につかはしける　よミ人しらす

あまのかはとをけれとひるて見なきつゝゐるらん

よそにすてねまてまもおもふかひ逢坂山にみちはまとひて

おとこにつかはしける

人をあやしとのみいはるれはよ河の錦ぬらしてそすま

女のもとにつかはしける

夢にのみこゝにし帰る山ちりも秋のすゑ我そみえ

かへるさをとひてそゆくてそありといへ

女のもとにつかはしける

兼輔朝臣

なかなかにことをつむありけ何つてのひとへも君を我やたのまん

きとき雨にぬれけるたよりやむしとたのまれと

みよりて京へ人につかはしける　つゝくにみのゝ

しはすつこもりを侍ける　よみ人不知

わかやとをとふらん白露のおきてをれても秋のみそ
あひ思ひて侍ける人のもとよりひさしくとはさりけれは
ましていかにふそてまさにいさあるたまやとたのまし

とよみて侍れは

ゆくゑもあらんとそ思ふまてそも人やきあかしとこそまよひ

人のもとに遣しく侍りけるとおもひて

侍れはりのふかきさつまを侍ける

在原業平朝臣

なにとそ我らへともかへにかくとも侍りわたり

おとこ侍女をいとせちにいひわたり侍けるを女のそ

まりなしといひをせ侍れけれ

元良のみこ

思遣といふそそなたはわたれおもひかな涙とみてねと思へ

女のもとより心さしのほとをなんえしらぬと

藤原興風

いへりけれは

我恋をしらんと思はゝ田子の浦にたつらん波の数をかそへよ

いひかはしける女のもとよりなをさりにいふ

にこそあんめれといへりけれは

清ゆき

いろふかくうつりそめてまでおもふらんとえやは月せけり
めてたくひける女のもとにおくりける
まろかとしもせさせけるほどは
けるといひける　大江朝綱朝臣　参議天徳元薨　七十三

足引の山井はたえず結ぶともおもふ心のなかなかひつかしもの
おもふかなりのなかひつかしめりけるを
さらにさていま人はいかれはけるうしき
貞元のみこ　閑院三のみこ 母治部卿仲統女　清和第三皇子　寛平元薨

大かたはなそや我かなのをしからん昔のつまと人にかたらん
返し　おなし女　在原棟梁女

人はいさ我はわすれすかはるれは昔としもなくすくすとこそいへ
思ふ女のみせさりける女のもとへつかはしてはべ
よみ人しらず

わすれはなく中の涙にまはりて思ふさま海のおもしろきを
おなしところふかくみえるかなしとえたつは
さりける女なり

河とこそ涙の中におもふらぬいはそ袖の涙なりけり
心にしおもひける女につかはしける
橘さねとし朝臣　近衛中将延長二年叙從四位下　天慶二中納言　四年薨　六十五

あま雲のよそになりゆく雲のよそにのみてなかめつつあはせなる

ながしゆきさ

経の江れ流れにハおもねとよそりふんの君よりも世に為かれし
筑紫まつりけむ　よミ人しらず

見ぬ程よりおもひそめしかともやかてハ思ひゆかぬ
涙より出くる流れつゝそしあかりけまし八
中納言更衣　参議伊衡女

思ふとも人ハ志るまし近き道をもいつとかとよるまし近き道
流れへし
延喜御製

うつせミそらふへりけり夢よのミもとひ近き程やそかそをりくん
驚きしらず
藤原ちかね

なかきてハゆくこと近き波川秋月おしやらぬらん
在原棟梁

秋虫の声よしとハ白妙の浜の真砂もつきぬべらなり
流し秋を

波まとひのさゆき福ありハいはくむゑにいとゝ流しくらまし
坂上是則

あふさきさひやかそとおもひあつのねぬなミきそにあすきさ
とし秋流しくかよりし続きの人よ流しらし
けり

玉のをとみえてぬきさ命りそて月あれ恋りするかな
つしゆ名

題しらす　平定文

我のみやかくそこふらんとこりふたひをかゝぬなかれのと

返し　このめのと

梅のねもみえ海つともいつせんきちにそ志つねなるぬゝ

人にもあらぬ女乃家にわたりふゆまりていひ置

侍けり　清正朝臣

まとひ侍る我身は露となるらしと思ふかゝりけり草葉にこそ念

題しらす　在原元方

見るめあるなれさやこひてわせなきに立よるかたも志らぬ契りは

善家なりといふ戸乃ありし女とものいひ

けるにおやのとかめしかは出入よさかれた

又のあしたにつかはしける

藤原滋幹　大納言国経男　延長六年右少将　承平元年卒

なかとりに出にし舟よりも我そよるへもなきこゝちせし

題しらす　よみ人しらす

高砂のをのへの白雲かゝりける人のこゝろをたのみけるかな

なりあきらのみこみまかりて母の更衣さとに侍ける　四品天暦二年閏四月薨　藤淑姫　参議菅根女

おくり侍りける

延喜御製

よそにのみ松はかなしき住の江のゆきてはへてそみまくほしき君

題不知　　　源ひとしの朝臣

かけろふにみしはかりにや浜ちとり行ゑもしらぬ恋にまとはん

あふ事はいたしらえあはすまかりけるへ人に
つかはしける　　藤原兼茂朝臣　参議右兵衛督　延長元年

よし河のそこはかなくもあふせありてなみたのさきそあるさき

女のもとにつかはしける

橘実利朝臣

流しとも思ひそそめぬ涙川あれて人をたのむへしやは

返し　　よみ人しらす

なかれてとたのめしことは涙川けみゆ人をもおもふなくよ

人をとはてひさしくつかはしける

平定文

何よと今はかのまん子やまかれをたのまけね我身なりけり

返し　　おほつふね

千早振神も見てしかあはれねしはまくわかこゝろは

女のもとにまかりたりけるをとくかへし侍りけれはいひ入侍ける

つらゆき

恨ても身こそつらけれ唐衣きていたつらにかへすと思へは

あひしりて侍ける人をひさしうとはす

てゆりあるまゝなれハ門よりかへしつゝかりし

けるに　　　壬生忠峯

住吉乃松よりまちかき白波のくつおりりやねハなかるらん

おとこれりとよりいまハと人おんなかれなそ

いそりけるハ女よかへりて

よみ人しらす

思ふとも逢ことをおほうをあえれとそてたに重ね

返し

春日野乃飛火の野守みるみをとなきなといひつくさそ乏

よみ人しらす

忘れてはよにおけるみのなきたやすくつとめなきん

人のこゝろのかくりけるとし

右近

わすれんとたのめし人ハおもとこそいひしことのハいつらいふらん

さゝふの郷にれかやまにさよはりのあえん　前斎 和香子 延長二年乃出家

とみちのくふくにはつ取をとかくしてあに

よみりしていまハふむてつ可すとひけ

まてし

源清蔭朝臣

ゆくとも猶まえのはなれハ立よりおへてもかゆかぬ

と女のみをとめれらんといひ侍りけるにみをさり

なれしらゝみけるふそのみならしはゝさつけてつかはしける
よみ人しらず
これらく恨ともあらはれ出しるめてくいさへはらん
ひさしうあはさりける女につかはしける
源さねかう
恋ひさやあひみぬほとを紛とかそふかりふなさんのゆく
よそにて我をしなかねあふよの浦のもとによせ経ん
題しらず
藤原ありさね
白浪のよするいそまをこく舟のかちとりあへぬ恋もするかな
大伴黒主
源うかふ 浮
恋しさは寝になくさむともなきにあやなくめをもさますなる
といひおこせける女に
源もとくる 後
少将侍 宣旨
右大弁 唱男
ひさしくて恋わたるかな住の江の岸に年ふる松ならなくに
題しらず
藤原清正
おほよその世をそむきつゝ行の雨の夜さへ恋もするかな
かきくらしふなりゆく人に思ひみちける
枝につけてつかはしける
よみ人しらず

はなてふなの山これは梢よりこそ色かはりけれ

女のもとよりかへりてあしたにつかはしける

源しけみつの朝臣 康保元参議 元中納言 代明親王二男 後大納言 長徳四薨

かへるさもしらねはそ山より出ん月とみましを

兼輔朝臣にあひしりてつかはしける

いさりけるなり

ことをかの母

ゆりとけぬ君か宿けのしらつゆに袖はとまれるなこりはまた

方ゆかりけるかたへにねるとて

藤原有文朝臣

かくとたにおもはぬ君にこゝろそてあやなく夜にまかせん

読人しらす 大江千古

こひやせんなかなかに月ありせはむもひよそにひ君をみまし

思ふとて人に逢ひける女のもとによりてはてまれて

くをとりて侍けるにまかりかりさねたち

よ りをもしりのみなて

あふ坂をいましこえけるそにひともかゝ人とのこゝろ 清平

読人しらす あつまれみそこ

ゆくのきしふるはのねもかけてこそ人にあかんとそしふ

しのひてかひをよりける侍るにかへり

菅原忠国

いさり火のかけのかけのふかくして あかつきハ悪風下まけに
寛平御時后の宮の歌合にて乃ぬ
桜のめくりふのとく人ハさ子ハ世をぬまふて
ちりしよせてまさりなれとかささて此桜よ
むらさひけきて也

小八条の御息所

立よるハ花をふむつりちる花も誰かおもれ空ともなく
おもとのりとにつらつけり

古た

我独ハなかの月も杉山からよりはのこゑを日にも
月をあかれとふいむなりとふ人のあり
けまたし　よみ人しらす

独ねの虎にさまよふにおきあかて月をかまとひそそろ
おもとれりとにつらしけり
かへにさむき我身ハ立をそいふ世よりとハまき
もしめそ人よけるもしきて
人なてふいふよのかれ中よりそえひけてよ山みえけり
まつた人をそてつらしけり

貫之

なし

あかりしをかくれぬ思ひのおもひさは心さし人はつらかなるをかり
人の家より物見よりつる車をとゞめていつらかとて人つくされ
おかしき給ひれはそれとしらむとおもひけれとも
いてきつる所のおもしろきさくてつらかりきかゝ
よみ人しらす
人はまふんあやなくけ橋のはやうれたいとひをそ有けり
人をとひきそてこゝちをおもきやかつきん
りのをいまそすくして日ごろかれはおきさもかくれ
ほさてこれをおひけるか女のりとようなと
うゝしきれくしいとひて給けまへし

いとそゝふんありその御世に右近の馬場のよろそ侍りさ
こゝろけて給けまとといひつゝ人々こともなく
つまなかれはまれ見えたれはかうそしける
牡丹のことまつこゝしうて為新に鳴出て君にささせん
おとこ乃女をみつかしけるを程なくをせ
てあえりけまへは又はかなしきる
御しなくて君かたえは道白京はよりつきてかえ給そたけ
おもこれをひより渡りてこゝいまなん御り
てさつきゝかくとひひく給けかをさかり
菊花みてひ人はかまた月のさきはかりてう道のかえ

男のかくひさしうありてまうてこさりけるを見て
いとめつらかに十二年の山こもりしてなん
ひさしうきこえさりつるといひ入たりけれは
よひ入て物かたりなといひくるしつかはしける
御このみとも世さりけるほとに

出しより見えすなりにし月影は又山のはに入やしにけん

返し

足曳の山にさすらふてありつる月影はそこにそいてゝはかなかりけれ

人とそいひてつかはしける

平定文

浅からすたのむと見えしとふそむかし絵かきしにもおもふ我をとこそすれ

返し おほつふね

頼ませし人に絵かゝせ心またたのむこゝろをとはましものを

人のりをにもしめてみつゝありけるに

忍ひかたくてまかりつる紙もさむとひて

しありけれは 源わたす

つまにおもふよしの筆とみなからふたのむしそ数まさりける

くてなこせく物けるしと家つかへまうる人か

つまかれしいと便なくてみのあしかふところ

夜ふけまつけてなこせく給ける

かく露の情掛とハ之丸柏せぬりのハ扇子のまれ

返し

かゝるとそともいつくたのまんあてしこの花ハときれ

色みしあらはゝ